

# 4歳児の土・泥・砂に関わる遊びについての検討

## A Study of Play With Dirt, Mud, and Sand in Four-Year-old children

中川 欣子\*, 塩路 晶子\*\*

\*高松市立木太幼稚園

\*\*鳴門教育大学高度学校教育実践専攻

NAKAGAWA Yoshiko\* and SHIOJI Akiko\*\*

\*Takamatsu Kita Kindergarten

\*\*Naruto University of Education

**抄録:** 本稿では、幼稚園における幼児教育の事例を分析することで、4歳児の戸外での土遊びを検討することを目的とする。子どもの発達における土遊びの意義について4つの観点を明らかにした。第一に、物に対する先入観がない時、子どもは好奇心を刺激され、遊びに没頭する。その過程で知らず知らずのうちに価値を発見し創造していく。第二に、幼稚園の園庭での屋外泥遊びは、人工的に作られた砂場とは異なる。泥の柔軟性や水たまりの流動性は天候に左右されるため、子どもたちの認知プロセスを深めるダイナミックな環境が育まれる。第三に、水の存在は、子どもたちの外遊びの経験を高めるために極めて重要である。最後に、子どもたちの遊びにおいて、教師と仲間の役割が重要である。教師は安心感を与え、探究と学びを助長する環境を創り出す。さらに、子どもたちがイメージを共有することで、仲間意識と目的意識が芽生え、協同的な遊びが促される。

**キーワード:** 幼児期の遊び, 土泥砂遊び, 砂場, 環境

**Abstract:** This paper aims to explore outdoor dirt play among four-year-old children by analyzing cases in early childhood education within kindergarten settings. The significance of outdoor dirt play for children's development is highlighted, and four key perspectives are elucidated. First, when children lack preconceived notions about objects, their curiosity is piqued, leading to absorption in the play. Through this process, they can stumble upon and create values unintentionally. Second, outdoor clay dirt play in kindergarten yards differs from that in artificially created sandboxes. The malleability of mud and the fluidity of puddles are influenced by weather conditions, fostering a dynamic environment that deepens children's cognitive processes. Third, the presence of water is crucial for enhancing children's outdoor play experiences. Last, the role of teachers and peers is emphasized in children's play. Teachers provide a sense of security, creating an environment conducive to exploration and learning. Additionally, shared goals among children foster a sense of camaraderie and purpose, promoting collaborative play.

**Keywords:** Early childhood Education, Outdoor dirt play, Sandboxes, Environment

### I. はじめに

保育の環境の中で、土・泥・砂が、幼児の遊びの中で重要な位置を占めていることは、これまでも指摘されてきた。特に砂場における遊びについての先行研究は数多くあり、例えば、笠間浩幸(2018)は、ソーシャル・イノベ

ーションという枠組みの中で砂場の価値について、「子どもの内なる発育・発達を無理なく引き出す遊びを提供できる」「子どもたちのみならず大人にも創造的喜びを与え、親子関係を深める」「人と人をつなぎ、町や地域の文化創出に貢献することができる」といったことを明らかにしている。また、小谷宜路(2013)は、「砂場での幼児の育

ちを捉える視点として、科学性の芽生え、イメージと造形、安定感・解放感・充実感、人間関係、言葉」の5点を明らかにしている。また、泥団子を作る遊びについての先行研究としては、石川悟司（2016）が泥団子作りの過程における子どもの心の動きと保育者の意図の繋がりについて論じている。また、吉川暢子ほか（2020）は、主に泥団子作りという土を使った遊びについて、「芸術による多様な表現の手段や様式を活用した探究活動である ABR の理論」から考察している。一方で、砂場以外の園庭で幼児が土や泥に関わり、泥団子作りを目的としない遊びについての研究は多くない。そこで本研究においては、A市B幼稚園4歳児クラスでの保育事例を取り上げて、土・泥・砂に関わる4歳児の遊びについて考察を行う。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 実践園

A市にあるB幼稚園は、4歳児・5歳児各1学級、計2学級の幼稚園である。A市内にある多くの幼稚園は3歳児3年保育であるが、実践園は2年保育であるため、園児は3歳児保育をA市内にある他園で経験した後、4歳児保育から入園してくる。

幼稚園には、園舎及び園庭があり、同一キャンパス内には小学校がある。園舎には、陽当たりの良い南庭とともに、濃い木立の多い北庭と南西庭がある。砂場は南庭と南西庭の境にある。南庭のさらに南には遊具等が設置されている小学校と共有のスペース、共有スペースの西側は小学校の校庭となっている。園舎環境の位置関係がわかる略図は図1の通りである。今回の土・泥・砂に関する遊びが行われた場所は、図1において丸で囲んだ場所である。この場所は4歳児保育室の目の前にあたる。4歳児保育室の南側には広く長いグリーンマットと呼ばれるテラスがあり、各クラスの靴箱が設置されている。園児は、毎朝、図1において矢印で表されたルートを通して登園する。登園の際には、丸で囲んだ場所のそばを通ることになる。また、保育室と園庭を行き来する際には、テラスに座り、南庭を見ながら靴を履き替える。

### 2. 担任保育者

4歳児の担任保育者は、保育歴23年のベテラン保育者であり、保育事例の当時はB幼稚園赴任1年目であった。

### 3. 実践事例

本研究における対象児は4歳児30名である。2021年9月の保育実践の中から、幼児が土・泥・砂に関わる保育記録6場面を抽出し、事例に書き起こす。なお、保育事例に記述した子どもの名前は全て仮名である。

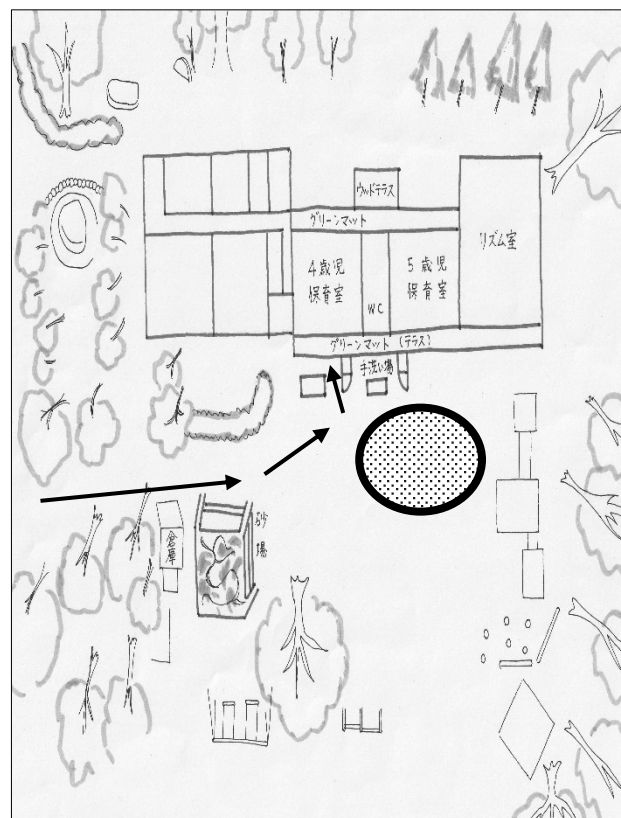


図1 幼稚園の園舎及び園庭の略図

### 4. 事例分析の方法

保育事例を分析する際に、幼児が土・泥・砂にかかわる様子には二重線を引き番号をつけた。

## Ⅲ. 実践と考察

### 1. 「偶然（どんぐりを落とす）と偶然（雨上がり）に今まで経験したことが重なって、遊びと場が生まれた事例」

#### 1) 実践事例「遊びじゃないのよ」（4歳児9月）

##### (1) 事例

入園して4か月を過ぎてはいるが、未だ、私（保育者）とタカヤの関係はたどたどしい。そんなタカヤは、友達との関係でもたどたどしい様子を未だ見せている。そのようなタカヤではあるものの、ここ最近、生活の中で、ふと気が付くと、私や友達のそばにひっそりと身を置いていることがある。

タカヤの朝は早い。毎朝、ほぼ一番に登園してくる。この日、珍しく私をめぐりて登園してきたタカヤ。そうして、満面の笑みで私に1つのどんぐりを見せた。「まあ、どんぐり? いいもの持っているわねえ」と私が声を掛けると、タカヤは嬉しそうにし、ひっそりと笑顔を保ちながら朝の準備を始めた。

タカヤが登園してしばらくたった頃、園庭に出掛けるために靴を履き替えていた私に、ふと見ると、テラ

スをすぐ出たところにある大きな水たまりで、タカヤが大きなスコップを持って水たまりの水をかき回している姿が映った。①私はタカヤに近づいて行き、「どうしたの?」と声を掛けた。すると、タカヤは、私の方を見ることなく、スコップで水をかき回しながら「どんぐり、探しよんよ」と答えた。朝、登園の時に「どんぐりを見つけたことが余程嬉しかったのだな」と思った私は、タカヤがさらにどんぐりを探しているのだと思った。なぜ、水たまりの中にどんぐりがあると思って探しているのかしら?と不思議に思いつつも、「どんぐり、あるといいわねえ」と声を掛けてその場を離れた。

しばらくして、私は、再びタカヤのそばを通りかかった。すると、今度は、そんなタカヤの様子を眺めるコウの姿があった。ここ最近、コウは、その水たまりで、その場所にできる泥をチョコレートに見立ててチョコレート作りを楽しんでいた。コウは、ただひたすらにタカヤの様子をじっと見ていたが、しばらくすると、その水たまりの隅っこの方で、いつものようにチョコレートを集め始めた。②そんな二人の姿を見届けて、私は再びその場を離れた。

しばらくして、私は、再び水たまりを訪れた。すると、先程の水たまりに、ルキがメンバーに加わっていた。保育室で自分の好きな遊びに一人じっくり向き合うことが好きなルキが、メンバーに加わり、しかも汚れることがあまり好きではないルキがスコップを持って、水たまりをかき回している③。私は、非常に珍しい組み合わせに驚きつつも、派手な言葉が飛び交うでもないこの三人の空気感をあまり邪魔したくないと思い、彼らが何をしているのかが気になりつつ、またその場を離れた。

さらにしばらくして見に行くと、その水たまりには、多くの人たちが集い、園庭を川のように掘り進める事態となっていた④。そのメンバーに、1学期に砂場でアマゾン川を作って楽しんでいた人たちもいたため、私は思わず「あら、アマゾン川みたいね」と声を掛けてしまった。すると、「遊びじゃないのよ!!」⑤とコウに穏やかに怒られてしまった。「じゃあ、何をしているの?」と尋ねたところ、コウは「お仕事です!!」と自信満々に答えた。⑤ちょっとよくわからない返答に困った私は、コウの言葉を受けて、「何の仕事をしているの?」と尋ねたところ、コウは「どんぐりを探しよんよ」と答えた。「タカヤくんが、どんぐりを水の中に落としちゃったんだって・・・」と私とコウの会話にルキが加わった。「だからね、水をどけよんよ」と遠くにいたソウシも加わった。⑥彼らの説明が今一つ理解できなかった私は、「どういうこと?」と聞き返した。すると、いつも私に優しく丁寧に説明をしてくれるケンが、私のそばにやって来て、いつものように丁寧に説明してく

れた。⑥聞くところによると「タカヤが、遊びに行こうとしたら大事にしていたどんぐりを水たまりの中に落としてしまった。どんぐりをすくおうとして大きなスコップですくってみたけれどすくえなかった。どんぐりはどこかに行ってしまい見つからなくなってしまった。水があるとどんぐりが見えない。水が邪魔だから水たまりの水を逃がすことにした」ということらしい。タカヤが水たまりを大きなスコップでかき回しているように見えたのは、実はそういうことだったのだと、私はようやく気が付いた。

この時点で、水たまりはすでに巨大な川になっており、川のあちこちでいろいろな人たちがこのプロジェクトに関わり、川を掘り進めている。私には、寧ろ、川作りを楽しんでいるようにしか見えない。それでも、子どもたちは真剣にタカヤのどんぐりを探しているらしい。私は、再度「タカヤくんのどんぐりが、この中にあるってということ?」とケンに聞いてみた。すると、ケンは「わからん。どんぐりや見とらんけん」と答えた。私は、そんなあやふやな情報に惹きつけられ、これだけ多くの人たちがよく集まってきたなあと感じながらも、何とも大変な話だと心底思い、「大変ねえ。見つかるといいわねえ」と彼らに伝えた。私も彼らが言うところの“お仕事”の行く末が気になるが、半信半疑な私が真剣に取り組む彼らの空気感にずかずか入っていくのがいささか憚られ、そばで別の遊びをしながら見守ることにした。

「ここが硬くて、掘れんよ」とコウ。その声を聞きつけ、コウと仲の良いケンがそばに寄って来て、⑦座って使うには明らかに大きなスコップを、持ち手を工夫しながらしゃがみこんで使い、二人で何とか掘り進めて行く。⑧ソウシは川を掘るものの、なかなか水が流れずに四苦八苦している。掘って水を流すことを諦めたのか、そばにいたヨシキに「この水、そっちに持って行って」と頼み込む。⑨ヨシキは、スコップをパタパタと仰いで使い水を川に流していく。⑩別の場所ではジョウが「ここを掘って行ったら、水があっちに行くんで」と園庭の真ん中に川を掘り進めて行く。⑪そんなジョウの勢いに惹きつけられ、たくさんの人が集まり、ジョウと共にどンドン川を掘り進めて行く。⑫そんなジョウは、遠く離れているにもかかわらず、なぜか私の存在を感じているようで、時折「先生、見て。すごい長い川になってきたで」と自慢げに声をかけてくる。⑬私は、そのような彼らの様子を眺めながら「いや、どう見ても楽しそうに川を作ってるやん!!」とコウが最初に言った「お仕事です」という言葉を思い出していた。

さて、そんなことを1時間半ほどしていたのだが、どんぐりは未だ見つからない。しかしながら、そろそろ

お昼時である。どうしたものかと私が悩んでいたその時、「あった!!」と声が上がった。見ると、水たまりのど真ん中で、タカヤがどんぐりをつかんで手を高々と上げていた。⑬すると、その場に参加していた人々から、一斉に大きな歓声と拍手が沸き起こった。⑭私も「え!!本当にあったの?遊びじゃなかったのね?!」とびっくり。タカヤの満面の笑みを見ていると、このプロジェクトにはあくまで参加していなかったという自分のスタンスを忘れ、「良かった～!!」と思わず拍手を送っていた。

- ①大切などんぐりを水たまりに落としてしまい、道具を使って探す。
- ②どんぐり探しに興味を示しつつも、泥(チョコレート)集めを楽しむ。
- ③困っている友達のために、汚れを気にせず泥水をかき回す。
- ④多くの友達が集い、水たまりの川を掘り進める。
- ⑤「遊びじゃない」「お仕事」という言葉で自分たちの活動を価値あるものとして言葉で表現する。
- ⑥クラスの友達のどんぐりを探すという価値ある活動に参加していることを、皆で代わる代わる保育者に説明する。
- ⑦気の合う友達の言葉に反応する。
- ⑧道具を工夫して使う。
- ⑨試行錯誤して難しかった出来事を近くにいた友達と一緒に解決してほしいと願う。
- ⑩掘り進めやすい箇所を見つけて掘り進める。
- ⑪勢いのある友達の様子が惹きつけられて人が集まり、川の掘り具合がどんどん進んでいく。
- ⑫保育者の存在を感じながら遊びに没頭し、自分が試して成功したことを保育者に伝える。
- ⑬仕事が達成されたことに喜び全身で表現して伝える。
- ⑭仕事という共通の価値ある活動に対する達成感と友達の嬉しそうな様子に共感を寄せ、拍手で表現する。

## (2) 考察

子どもたちが遊びを展開した水たまりがあった場所は、靴箱前のテラスということもあり、登園してきた人や朝の片付けが終わって遊びに向かう人たちの通り道となり、人が集まるきっかけをつくることとなった(②③④)。「友達のどんぐりを探す」という出来事は、子どもたちの「何だか面白そう」という思いからその活動に参加するうちに、「遊びじゃない」「お仕事」という言葉からも表れているように価値ある活動へと変容していった(⑤⑥)。つまり、保育室の近くで起こった「友達のどんぐりを探す」という出来事が、人の集まりを生み出し、人をつなぎ、人がつながることで一体感を生み、共通の価値ある活動へと変容していったのだと考察される。

「友達のどんぐりを探す」から始まった集まりは、その

目的(思い)を根底に置きながら巨大な川になっていき、そうした子どもたちの様子は私たち大人にとっては寧ろ川遊びを楽しんでいるようにしか見えない。そこには、4歳児ならではの、気の合う友達と面白そうだと思うことをいろいろとやってみるといふ姿があったからである(⑦⑧⑨⑩)。「どんぐり探し」なのか「川作りの遊び」なのか、どちらが目的かもはっきりとはしないままに、この場所で経験できる“面白さ”は進行していく。そのような友達の“面白さ”に引き寄せられ、自分のタイミングで徐々に加わっていく(⑪)。「どんぐり探し」という共通の枠組みの中でも自分の面白さを展開していく姿は4歳児らしい。子ども自らが自分の世界を生み出しているようであっても、保育者に自分が行う価値ある活動を伝える(⑫)あたりは、少しずつ安心できる環境から外の世界へと自分の領分を拡張しつつある4歳児らしい姿である。

こうして、一見、川作り遊びの面白さを展開している様相を見せていた子どもたちの遊びであったが、友達のどんぐりが見つかる、自分たちの「友達のどんぐりを探す」という共通の目的が達成されたことに対して晴れやかな気分となり大きな歓声と拍手が沸き起こる(⑬⑭)。こうした様子から、川作りを楽しみながらも、友達の気持ちへ心を寄せるという思いは、この遊びの根底に確かに息づいていたことが窺える。こうして寄せられた友達からの思いを感じることを積み重ねることにより、友達と関わる(遊ぶ)楽しさへの入り口となっていくのだと考える。4歳児の子どもたちにとっては、まずは気の合う友達から、そしてさらに様々な友達へと領分を拡張していくことが、5歳児につながる協同性へとつながっていくのだろう。また、4歳児の子どもたちにとっては、思い切り屈託なく遊び、身体ぐるみでその対象、この場合は「土・砂・泥」と関わる中で、その対象に対する“面白さ”を見出していくのではないかと考える。

## 2) 実践事例「遊びじゃないのよ」(4歳児9月)

### (1) 事例

翌日、登園してきた子どもたちは、どの人もどの人も、まずは昨日繰り広げられたどんぐり探し場の跡地に吸い寄せられていく。①そして、「すごい!!水がなくなっとなん」「すごい!!昨日のまだ残っとなん」と、もれなくどの人も驚く。②そして、朝の片付けを終えた人が、一人また一人と、大きなスコップを持って、「昨日の続き」を始めた。③本日は、タカヤはどんぐりを落としたわけではないので、本日彼らがしていることはどんぐり探しではない。思い思いの配置につき、土を掘り、道を修復しながら掘り進めている。④一生懸命繰り広げられている最中、コウが「水が全然流れん…」と呟いた。⑤彼らは、どうやら水を流したいらしく、溝を深くしたり、川幅を広げたりして何とか水を流そうとするのだが、水は一向に流れる様子を見せない。⑥

コウは「水がなくなりよんちゃん」と呟き、今度は土を固め始めた。⑦それでも水は一向に流れない。ジョウは「スコップがよくない。だから変な道になる（だから水が流れない）」のだと言い、砂場に別の種類のスコップを取りに行き、掘り始めた。⑧それでもやはり水は一向に流れない。すると、おもむろに、タカヤが、砂場からバケツを取って来て、水道で水を汲み、じゃあ～!!と水を流した。⑨そんなタカヤの様子を一瞬驚いた表情で眺めた子どもたち。⑩ところが、水が流れた途端、「流れた!!」と大騒ぎになり、皆がタカヤの真似をして、水道で水を汲み、一斉に川に流し始めた。⑪初めは、小さいバケツで流していた子どもたち。ところが、その水の量では満足がいかなかったのか、ジョウは砂場から配管型の樋とトラックを持って来て、水道から一気に大量の水を汲み、一気に大量の水を流すという手段に出始めた。⑫子どもたちはとても嬉しそうに「見て!!水がビュンビュン流れるんで!!」と自慢げに私(保育者)に報告してきた。⑬一度流した水は、昨日と同様に一向に引く気配がなく、水はどんどん溜まり、どんどん流れていく。そんな様子にコウは「凄いんで!!水、全然なくならんので!!」と、さも自分の手柄のように報告してくれる。⑭ケンもいつものように、またいつのまにか私のそばにやって来て「砂場は(水が)すぐなくなるけん」と自慢げに報告してくれる。⑮彼らの言う通り、確かに砂場ではすぐに水が引いてしまうのに、なぜこの場所の水はなかなか引くことがないのだろうか、と私も不思議に感じた。そこで、思わず「ほんまやな。砂場の水はすぐなくなるのに、なんでこの水はなくならんのか?」と尋ねた。すると、ケン「だって。砂場は砂やん。ここのは砂じゃないやん」と答えた。⑯「え?!どういうこと?」と思った私は思わず「これ、砂じゃないん?」と尋ねた。すると、今度は私たちの会話を聞いていたらしいジョウが「そうやで。これは砂とちゃうで」と答えた。⑰「え?!どういうこと?」と心底思った私は思わず「じゃあ、これは何なの?」と尋ねた。すると、ジョウは、「だけん、砂じゃないんやって!」と言って、ひたすら水を流し続けていた。⑱

- ② 昨日の楽しんだ遊びの場に興味関心をもち近づく。  
 ② 昨日関わった土壌の場の水が引いていないことに気づき、驚嘆する。  
 ③ 昨日した遊びの続きを始める。  
 ④ 自分が興味関心のある場所に行って関わり、昨日の遊びを再現する。  
 ⑤ 水を流したいという思いをもち、思うようにできないことを言葉で表現する。  
 ⑥ 水を流したいという思いをもち、思考を働かせて自分なりに関わるが、思うようにできない。  
 ⑦ 思うようにできないのは水がなくなってしまうという

- からだと予想し、土を固めるという新たな方法を試す。  
 ⑧ 思うようにできないのは使用する道具が関係していると推測し、新たな道具を選んで使う。  
 ⑨ 水を流したいという強い思いから、元々あった水ではなく新たな水を流すという解決策に至り、バケツを使って水道水を流す。  
 ⑩ 友達の突拍子もない考え(行動)に驚く。  
 ⑪ 水が流れた状況を喜び、友達の突拍子もない考え(行動)を真似る。  
 ⑫ 新たな道具を選択して使い、新たな方法で大量の水を流す。  
 ⑬ 水が勢いよく流れたという状況や喜びを保育者に伝える。  
 ⑭ 砂場で水を流した経験と比較し、土壌の違いを自分なりに推測する。  
 ⑮ 土壌の詳しい違いを体感で推測し、水を流すという興味関心にのめり込む。

## (2) 考察

子どもは遊びが充実していると、その遊びに夢中になり没頭する。子どもが遊びに夢中になる姿のひとつに、繰り返し遊びを楽しむという姿がある。本事例においては、子どもたちは日をまたいでも、昨日の遊びが気になり、登園時に通るかかる際に、昨日の遊びの場がどうなったのかを確かめる姿があった(①)。そして、昨日の遊びで得た“楽しかった”という心の充実を経験として刻まれ、その楽しさを再現しようとする姿で取り組んでいた(③)。心の経験を再現しようとする姿が各々によって様々である(④)ところは4歳児らしい姿である。登園時に昨日の遊びを確かめた子どもたちは、水が引いていないことに驚きを見せた(②)。その驚きの気持ちは、子どもたちの中で「水」というものがクローズアップされ、関わる“もの”として価値ある対象だと意識化されていくことにつながっていた。すなわち、この場所における土壌に関する遊びの面白さを構築する要素のひとつとして「水」が重要な要素となる瞬間になったと考えられる。このような状況を経て、昨日の遊びで既に存在していた水が流れる「川を作る」という遊びへの思いは、今度は川に「水を流す」という「目的」へと変化していくこととなった(⑤)。この目的を実行するために、子どもたちは各々に仮説を立て、考えついた方法を各々に試し、各々に試行錯誤しながら思考を思い切り働かせている(⑥⑦⑧)。子どもたちは、この遊び場にあるものだけでなく離れた場所にある道具を活用したり、今まで溜め込んできた知識の経験を総動員した方法を使ったりしている。

各々に学ぶ「水を流すために必要な策を講じる」という行動ではあるが、傾分が拮がり気の合う友達とつながり合って遊ぶ4歳児は、同じ場で遊ぶ友達の存在を感じている。それゆえ、ある友達が水道の水を流すという行為を

各々に活動していても気付く(⑨)。この友達の行為は、そこにある水を何とかして流すという子どもたちの固定概念を壊すような行為ではあったことから初めこそ驚きを見せる(⑩)が、そのことよりも水を流すという目的が達成されたことに対する喜びの方が勝り、友達の行動を真似、水道の水を使って水を流すための方法を試行錯誤し、水を流したという目的の達成を喜んだりする姿へとつながっていった(⑪⑫⑬)。

水が流れたという出来事は、子どもたちの「水を流す」という目的が達成されたという出来事となり、さらには試行錯誤した経験とも相まって子どもたちにとっての大きな自信へとなっていく。この自信からくる心の領分の拡がりには、以前と同じように試行錯誤した砂場での遊びの経験とつなげて考え始める(⑭)要因となる。砂場で遊んだ時の記憶とこの遊び場での様子を「水」というキーワードとつなげて比較し、水が引かないことに対して、土壌が違うということを“何となく”感じる。この場所の土は日が経っても水がひかない、砂場にあるものは名称から「砂」である、この場所の土壌は砂のようだけれど砂ではないようだ、砂場のそれとは何かが違う。子どもたちの会話からは“何となく”の思考が垣間見られる(⑭⑮)。こうした感覚的な経験から学んだ気付きは『土・泥・砂の性質』に興味関心を深める入口としての育ちの兆しにあたるのではないかと考えられる。

## 2. 「新たに拡がった領分の中で、安心・安定を土台にしながら、身体ぐるみで夢中になって“こと”に向き合って遊び、“楽しさ”を見出していった事例」

### 1) 実践事例「なんか凄いんになってきよる…」(4歳児9月)

#### (1) 事例

あれから数日たつものの、未だ盛り上がりを見せる水たまりでの泥遊び。土日を2度経ても、水はまだ引かない。登園してきた子どもたちは、靴箱に来る前に、ひとまず、その水たまりに立ち寄ることが日課となっている①。ぼうっと水たまりを眺めて、「水が全然くならん…」と呟いてから靴箱に向かう①コウ。水たまりのところにまっしぐらに早足でやって来て、「水がなくならん」と私(保育者)に向けて呟く①ケン。水たまりまで友達と走ってやって来て「すごい!!水がまだある!!」と友達と一緒に驚く①ジョウとソウシ。水たまりの気になり方も確かめ方も驚き方も人それぞれで面白いなあと、私も彼らに関わりながら、引かない水に不思議さを感じていた。

さて、子どもたちは、本日も川を作ろうと、大きなスコップを持って来て川を作っていた。うまく削れない部分を、小さいスコップを持っていたヨシキが削っていたところ、たくさんの土が出た。その土が水と混ざ

り合い、どろーっと川に落ちて行ってしまう②。ヨシキが四苦八苦する様子を眺めていた③コウ。何を思ったのか、そのどろーっとした部分をぺちゃぺちゃと触り始めた。「なんか、気持ちいい…」と呟く④コウ。本当に気持ちよさそうにしつとりとぺちゃぺちゃと触って感触を楽しむコウを見ていると、私も触ってみたいなり、一緒にぺちゃぺちゃと触って楽しんでいた。ぺちゃぺちゃを地面に丸い形にして、手で触って感触を楽しんでいる⑤様子である。しばらくすると手に取り少し丸めて両手でぺちゃぺちゃと感触を楽しみ、「ハンバーグみたい」と言って楽しみ始めた⑥。そうして、さらにしばらくすると、自分の手に収まるサイズくらいの量の泥を手に取り、丸め始めた⑥。それを見た多くの子どもたちが、両手に取り丸めて、団子作りを楽しみ始めた⑦。私も一緒になって楽しみながら、泥団子を作ってみたくなり、ほんの少し離れた場所にあった少しだけサラサラの砂を手にとって丸めた泥の団子にかけてみた。初めは、粗々過ぎる砂とぺちゃぺちゃの泥でうまく丸めることができなかった泥団子であるが、何回か繰り返すうちに、よくある泥団子の様相に変化し始めた。それを見た子どもたちが私のところに「何しよん?」と寄ってきた⑧。私は「いや、泥団子ができんかなあと思って…」と答えた。子どもたちは私のしていることを見て「何で砂かけよん?」と聞いてきた⑨。そういえば、泥団子作りになぜさら砂をかけるのかわからない私が答えあぐねていると、子どもたちは私のそばに来て真似をし始めた⑩。真似をしながら、「何で砂かけるん?」と口々に聞いてくる⑪ののだが、私は「いや、何となく」としか答えられない。それでも何だか丸まって泥団子の様相になってくる私の泥団子を見て、子どもたちもよくわからないままに、私の真似をしている⑫ようである。そうしているうちに、子どもたちの泥もだんだんと固まり始め、丸い団子状に変化し始めた⑬。「なんか、お団子みたいになってきた」と言って、砂をかけるペースがどんどん上がる⑭子どもたち。先ほどまで「何で砂かけるん?」「これってどうなるん?」などと、話も楽しみながら砂を掛けていた子どもたちであるが、何かのスイッチが入ったようで、無言になり砂を掛けることに集中し始めた⑮。

中でも、ノノカの泥団子は、色も変化し始め、私たちがよく知るあの泥団子の様相に変化し始めた。それを見た、ノノカの隣で泥団子を作っていたサキが、「見て～。ノノカちゃんの泥団子、凄いんで」と私に話し掛けてきた⑯。ノノカも「なんか、凄いんになってきよる…」と何だか不思議そうに私に泥団子を見せる⑰。ノノカの泥団子を見た私は、その出来具合にびっくりして、「すごいな。泥団子やん!!」と思わず声を上げた。そうしたところ、周りにいた人たちが、さらに何人か

やって来て「何しよん?」と言って、この泥団子作りに加わっていった⑮。

- ①前日の遊びの続きを確認することが日常的になっている。
- ②削った土と水が混ざり合い、新たな土壌が生まれるという状況に遭遇する。
- ③水を流したいが思うようにならない友達の苦戦する様を観察する。
- ④友達の様子ではなく、ドロっとした土壌に興味を示し、感触を楽しむ。
- ⑤川遊びではなく、そこで出来た泥に興味を示し、関わって感触を楽しむ。
- ⑥手で楽しんだ感触から、食べ物に見立て、楽しむ。
- ⑦友達の行為に興味を示し、真似て、楽しむ。
- ⑧保育者のしていることに興味をもち、関わりをもとうとする。
- ⑨保育者のしていることに興味をもって関わりをもつとともに、疑問を抱き尋ねる。
- ⑩保育者のしていることに興味をもち、自分もやってみる。
- ⑪保育者のしていることに興味と疑問をもち自分もやってみるが、疑問の解決には至らなかったため再び尋ねる。
- ⑫保育者のしていることに疑問をもちながらも、保育者の真似を続けてみる。
- ⑬続けてやってみるうちに泥団子の様子が変化する。
- ⑭変化に気付いたことにより、何だかわからない砂を掛けるという行為への価値を感じ、砂を掛ける勢が増す。
- ⑮砂を掛けることに夢中になる。
- ⑯友達の泥団子の変化に気が付き、その驚きと嬉しさを保育者に伝える。
- ⑰自分の泥団子の変化に何だかわからない驚きを抱き、保育者に伝える。
- ⑱盛り上がる友達の様子に引き寄せられて、自分たちも泥団子作りを始める。

## (2) 考察

子どもにとって充実した遊びは、子どもたちによって毎日続けられていく(①)。本事例では、遊びそのものを楽しみつつも、この場所の水が引かないということが、子どもたちにとって魅力的な要素となっており、「自分で・保育者と・友達と」その不思議さを共有している(①)。

この場所で楽しんでいた遊びを活動として見た時に、子どもたちがしていることは「川を作ること」「水を流すこと」であるが、本日のそれは思うようにならず、たくさんの土が掘り出され、水と混ざり合い、ドロっとした感触となって川底に落ちてしまうという現象が生じる(②)。子どもたちとしては当然、試行錯誤する(③)。日頃から観察することに長けているある子どもが、そのような友達の様子とともに、ドロっとした感触にも注目し、さらに

元々、その場でチョコレート集めを楽しんでいたことも重なって、思わず手で触り、感触の気持ちよさを味わう子どもが現れる(④⑤)。そうして、元々食べ物に見立てることを得意とする彼が、感触を両手で存分に味わううちに、その泥を扱う様と泥で出来上がったものの形状がハンバーグに似ていたことから、「感触」「泥を食べ物に見立てること」「泥を丸めること」へとつながっていく(⑥)。

このような子ども発信の“何だか楽しそう”な光景は、友達の情報が行き交うようになってきた子どもたちに伝わり(⑦)、川を作って水を流す遊びの場は、新たな遊びを楽しめる場へと変容していく。

ここで、保育者は自分が楽しみたいという欲求から泥団子を作る。保育者がしたいことを優先してしまったことに対する良し悪しは別として、保育者との関係が構築されている子どもたちにとっては保育者がしていることは子どもたちの興味関心を引き付けるには十分な要素になって新たな遊びがで始める(⑧⑨⑩⑪⑫)。保育者のしていることは総じて魅力的なのだろうが、これについても子どもたちにとっては“何だか楽しそう”のひとつである。そのようなことをきっかけにして、自分がしている泥団子に変化し始めたことに気付いた子どもたちは、自分のしていることに価値を見出し、遊びのスイッチが入り、どんどん夢中になり、のめり込んでいった(⑬⑭⑮)。

このようにして夢中になり、ひとつのものに向き合い続けるうちに、自分が価値あると見出したその泥団子は、“何だかよくわからない”が自分の予想を超えたものへと変化していく(⑯)。こうした友達の様子は、自分事としても受け取られるようになっていく(⑰⑱)。保育者がしていることを真似、何だかわからないけれどやり続けるうちに、楽しさや面白さが生まれる。泥団子からの学びは多々あるが、その入り口は“何だかわからない”といった曖昧な部分から生まれるのではないかと考察される。

## 2) 実践事例「もっと大きいの、ないん?」(4歳児9月)

### (1) 事例

本日は朝からぽつぽつと雨。朝登園してからしばらくすると、ジョウとソウシが、外に遊びに行きたいと言い出した。私(保育者)は別の遊びを他の子どもたちとしていたこともあり、外をのぞくこともなく尋ねた。「雨降ってるでしょう。どんな感じなの?」すると、ジョウが「ぽつぽつだから大丈夫」と答える。私は、ぽつぽつでも雨であるならば濡れてしまうではないかと思ったが、とりあえず「外で何かしたいことでもあるの?」と尋ねてみた。するとソウシが「水たまりがどうなったのか見に行きたい」と答える①。この頃の子どもたちは毎日のように水たまりでの泥遊びを楽しんでいる。そうして、毎日変容する水の様子、泥の具合に興味を示し、面白さを感じている。そんな子どもたちの様子を思い出しながら、確かめに行きたいと思うのも当

然だと思った私ではあるが、雨に濡れるのはやはり心配でもある。そこで私は「わかった。濡れて風邪をひかないように気を付けてね」とだけ答えた。近頃の彼らと私の関係は、そういった抽象的な言葉掛けをしても、その裏の「濡れないような方法を考えてね」というところまで通じているのではないかと思い、私はそのような言葉掛けをしたのである。こうして、ジョウたちは、連れ立ってぼつぼつと雨が降る中を園庭へと出掛けて行ったのだった。

保育室の中での遊びをしていた私は、しばらくして、先程連れ立って園庭へと出掛けて行った子どもたちがまだ帰って来ていないことに気が付いた。私は保育室からテラスへ出て園庭を見ると、遠くの水たまりに集まる4人の子どもたちの姿が見えた。外に行きたいと言ってきたジョウとソウシに加えて、コウとケンの姿も見える。ソウシとジョウが何やら楽しんでおり②、その様子をコウが近くにまで寄ってきて見つめている③。時折、「きゃっきゃっ!!」と言って笑い合っている④。そこから少し離れたところで、ケンが傘をさし何やら指示を出している⑤。コウとジョウは、カラー帽子を被っており、雨に濡れないでねと言われていたジョウはなぜだか麦わら帽子を被っているが、自分なりに濡れない方法を考えたのだろう。

その様子を見てみると、ジョウとソウシが、園庭の色々なところに行き、大小様々な石を運んで来ては、頭の上まで持ち上げて水たまりに落として楽しんで⑥ようである。ポチャン!と水たまりの中に落ちた瞬間に水が跳ね上がる様子を見て、顔を見合わせて「きゃっきゃっ!!」と言って喜んで⑦。そんな彼らと私の様子を気付いたアイとリカも「何しよん?ソウシくんたち…」と言いつつも「アイたちも見てきてえん?」と尋ねる⑧ので、「どうぞ。だけど雨に濡れないようにしてね」と返した。すると2人は傘をさして出掛けて行った⑧。

そんなことを30分ほど楽しんだ頃、テラスにいる私のところにジョウが駆け寄ってきた⑨。そして「もっと大きい、ないん?」と言ってきた⑨。こんなに遠くに離れているにもかかわらず私が見ていたことを知っていたのも驚きだが、「もっと大きい、ないん?」という尋ね方に、さも私が彼らが何を楽しんでいるのかを知っているような口ぶりであることにも驚いた。それでも一応「なんで?大きいのがいいの?」と尋ねたところ、ジョウは「だって、大きい方が、バッシェーン!!!!ってなるやんか」と身振りをつけながら答えた⑩。私は「大きい石は、あまり幼稚園にはないと思うけれど…。危ないから私たちも片付けているのよ。でも、もしあるとしたら、チャボ小屋の後ろのところの森とか、ユーカリの森とかかしらねえ…」と答えた。ジョウ

は「そう?!」とだけ答えて駆けて行った。

- ①毎日遊んでいる場所、水の様子が気になり、確かめたいという好奇心をもつ。
- ②何だかわからないままに、自分たちの好奇心を試す。
- ③友達が楽しむ様子を観察する。
- ④友達と試したことに対して楽しみを共有する。
- ⑤友達が試していることをともに楽しみ、自分なりの予想を立て友達に試すように促す。
- ⑥様々な大きさの石を水たまりに落とし、水の跳ね具合を試す。
- ⑦水の跳ね具合を確かめて友達と喜び合う。
- ⑧友達がしている楽しそうな様子に興味を示し、自分もそばで見てきたいと保育者に伝える。
- ⑨保育者の存在を感じながら遊びを楽しむ中で、大きい石がある場所を保育者は知っていると思い、尋ねる。
- ⑩石の大きさが大きいほど水の跳ね具合が大きくなると予想し、自分の予想を保育者に言葉と身振りで伝える。

## (2) 考察

本事例もいつもの場所で起こる。子どもにとってこの場所は、毎日の遊びの継続ができる場所であるとともに、何だか楽しそうなことが起こる場所であるという認識になりつつある。その言葉が「水たまりを見に行きたい」という言葉に現れている(①)。この場所では、自分の好奇心を試す・友達がしていることを観察する・友達と試す楽しみを共有するといったことが、自然と起こるようになっている(②③④⑤)。本事例では、対象が「水」とその他のものに移行されるのだが、偶然思いついたこのような遊びも思考を働かせることにつながっていくところが、この場所がもつ面白さでもある。

また、子どもたちは友達が楽しそうなことをしているという状況を感じ取る気持ちも育ち、友達の楽しそうな姿に魅せられて寄って来る(⑧)。

この“楽しそう”は、単に遊びを楽しんでいるだけではない。その遊びがもつ魅力に気が付き、自分の思考を試す場として存在価値が見出されているのである。それゆえ、自分たちが考えた(思いついた)仮説を試すという行為が生まれている(⑥⑦⑩)。

しかしながら、そのいずれの行為も保育者の存在が非常に重要であり、本事例においても子どもたちは遠くにいる保育者の存在を感じており、遊びに参加していると思って話しかけてくる子どもの姿があった(⑨)。子どもたちにとって基盤となる“安心”の拠点は、文字通り「ある場所」が拠点となることもあるのだろうが、遊びの中で子どもが保育者を訪ねてくる場面が多々あることから、「保育者」そのものが拠点となり、子どもの安定につながっていくのだろう。

本事例は、泥水や水たまりに直接的に関わる事例であり、ひとつの場所が条件によって様々な遊びが生み出さ



れる場所になり得るということがわかる。

### 3) 実践事例「全然できんやか…」(4歳児9月)

#### (1) 事例(4歳児9月)

戸外で遊ぶことが大好きな子どもたちは、土砂ぶりの雨が降る本日も、昨日の遊びの続きがしたいと傘をさして出掛けて行った。しばらくして、私(保育者)が保育室から園庭を覗くと、ジョウたちは、いつの間にやら傘もささずに必死で園庭を掘っている①。私は驚いて叫んだ。すると、私が何を言わんとしているのかジョウにはわかったらしく「だって、掘りにくいのに〜!!!」と私の声よりも上乗せするほどの大声で返してきた①。私も負けじと「傘はどうしたの?」と尋ねると「傘は邪魔なんやって!」とジョウたちは答える。「昨日の続きがしたい」「どうなるのかが知りたい」という欲求は抑えられないらしい。そこで、私は、以前他園でしたことがあったゴミ袋雨合羽を思い出し、提案してみたところ、子どもたちから「僕も作って!!」「私も欲しい!!」と声が上がった。そこで、欲しいと言う人たちにゴミ袋雨合羽を作り着せると、皆一様に笑顔になり園庭へと再び繰り出していった。

当初、水たまりの川作りをしていた人たちだけでなく、先日泥団子遊びに勤しんでいた人や先日まで水たまりに興味を示していなかった人など、様々な人が“ゴミ袋雨合羽を着ての園庭遊び”に加わっていた。「泥具合」がやはり気になる子どもたちは、両手を使えることも相まって、スコップなどはあえて使わず、両手で直接泥をすくって遊ぶ②人たちが出てきた。アイは手で泥をすくってこねたり丸めたりして友達と「気持ちいいね〜!!」と言い合っている③。手でハンバーグの種を作る様にリズムカルに形作っているのだが、友達とタイミングをはかりながらリズムを合わせ、きゃっきゃっと言いながら楽しんでいる④。長靴を履いてきていたミサは水たまりの真ん中に入っていて、泥を両手ですくっては水たまりの中に落として何やら楽しんでいる⑤。ゴミ袋雨合羽はお気に召さなかったリカは「泥遊びはしない。皆の様子を見てくるだけだから」と傘をさして出掛けて行ったのだが、皆の様子を見ているうちに自分もしたくなった⑥らしい。両手を使って泥団子を作るため、傘を地面に置き、その下に入り込んで傘を屋根のようにして、泥団子遊びを楽しんでいた⑥。私は「リカちゃん、雨合羽、作ろうか」と尋ねたのだが、「いい。こうしとったら、濡れんので!」とリカは答えた。

さて、川作りを楽しみに行ったジョウたちは、大型スコップを使って、昨日のように川作りをしていた⑦。しかしながら、前述したように本日は結構な土砂降りで、川を作るところか園庭は水が海のように広がっていてうまく作れない様子。ジョウが「全然できんやか

か…」と言いながら四苦八苦している⑧。そのうち、泥団子を作っているアイたちの楽しそうな雰囲気に取り寄せられていった⑨。

- ①雨に濡れることも厭わず、土を掘って川を作るという遊びに夢中になる。
- ②手を道具にして泥の感触を確かめる。
- ③泥の感触をいろいろな角度(こねる・丸める)から確かめて気持ちよさを味わう。
- ④泥の感触を活かして丸め、その具合が友達と同じであることに遊びながら気付き喜ぶ。
- ⑤水たまりの真ん中に入れることを喜び、その場所にあった泥をすくって感触を楽しむ。
- ⑥友達の様子に惹きつけられ、自分もやってみたいと強く思い行動に移す。
- ⑦土を掘って川を作るという昨日の遊びの続きを楽しむ。
- ⑧昨日のように掘るものの、昨日のようにはいかず、悩みながらも試行錯誤する。
- ⑨近くで泥団子作りをする友達の様子に引き寄せられ、川作りを諦め、泥団子作りを始める。

#### (2) 考察

水たまりでの遊びは、彼らにとって面白さを得られる価値ある遊びとして位置づいており、それは本来ならば外遊びが難しい大雨の状況であっても思いを抑えられない。しかし、大雨という状況は、いつも通りの環境の演出には至らず、いつもより水が豊富な環境となっている。しかし、彼らにとって、この遊びの醍醐味のひとは掘るという動作にあり、この遊びを進める重要な方法として当たり前に認識されている(①)。そのような中、彼らがこの遊び場で毎日繰り広げる魅力に惹きつけられてやって来た別の子どもが、彼らが当たり前にスコップという道具を使って遊ぶという認識を覆し、手を道具にして遊び始める(②)。泥の感触の気持ちよさに魅了されて、泥の気持ちよい感触を味わうことができる方法を見つけ、友達とともに気持ちの共有を図る(③④)。また、豊富な水という環境は、水たまりの中に入り「水」というものを存分に楽しむ環境へと変化していく(⑤)。元々いた人たちに惹きつけられてやって来た別の人たちによってもたらされたこの場所の新たな魅力に、また新たな人たちが惹きつけられ引き寄せられていくという現象が生まれる(⑥)。

「掘る」という遊びに魅力を感じていた子どもであるが、いつものようにはいかない状況を何とか打破しようと試行錯誤するものの、大雨という自然が創り出した豊富な水という環境になす術がないことを身体ぐるみで知ることとなる。結果、本日この場所で楽しめる遊びに引き寄せられていくことになった(⑧⑨)。

雨降りが続く季節には、室内遊びを充実させるような保育計画がなされがちであるが、雨の季節だからといっ

て戸外で遊んではいけないというルールはない。実際の生活でも、戸外へ買い物に行ったりお出掛けを楽しんだりもしている。ただし、全てのことが晴れの時と同じような生活であるかという点、そうではないのが実生活である。子どもの主体性を考える時に、もちろん「ああしたい。こうしたい」を実現していくことは大切ではある。しかし、自然と生きている以上、自分のやりたいと自然には抗えない時の難しさのようなものをわかっていくことも、幼稚園での生活においてはまた大切なことではないかと思う。

本日のような雨具合では土を掘って川作り遊びを楽しむことが難しかった子どもたちは、隣で楽しそうに泥の感触を楽しみながら泥んこ遊びをしている友達に惹きつけられ、遊びが移行していった。このようにして身体ぐるみで遊びを経験していく子どもたちである。大雨だから外遊びはやめましょうというのではなく、雨にもいろいろな状況があり、したいこととその状況を織り交ぜながら、どのように解消して共存していくかを考えていくことが大切であると思う。今回のような雨の日のたっぷりの水がある状態での泥の具合を味わったという経験は、晴れの日の遊びにもつながっていくのではないかと考える。砂場のような人工的に守られた場所ではなく、屋根のような守られたもののない園庭のど真ん中にあったこの場所だからこそ、子どもが創った環境が新たな環境へと変容し、そのことが子どものさらなる気付きにつながっていくことになるのではないかと考える。

#### 4) 実践事例「(泥団子) 育てよるけん!!」(4歳児9月)

##### (1) 事例(4歳児9月)

水たまりでの川遊びから、偶然始まった泥団子遊び。少々私(保育者)の介入がありながらも、やがて泥団子作りが発展し、子どもたちの間で流行になっている①。園舎の泥団子作りの伝統としては、リズム室裏の土を使って泥団子を作るとピカピカになるのだと先輩たちからは引き継がれているようだ。だが、今の彼らには、まだその知識はなく、水たまりの泥を使って泥団子を作っている①。

さて、水たまりの泥は水を多く含んでおり、細やかに工程を進めなければ、なかなか良い形の泥団子にまで辿り着かない。そんな状況を打破したのはケンであった。毎日こつこつと、水たまりの泥をすくって、何個も何個も泥団子を作っていた①。そのうち、泥団子になるコツをつかんだらしく、それが余程嬉しかったようで、ある日ケンが私に「先生、水たまりの泥のこのあたりの土をさ、こんなふうにくっつけて、水をぎゅーって絞ったら、泥団子になるんで!!」と自慢げに教えてくれた②。私もケンに教えられたように真似てやってみると、とても良い具合の泥団子になる。ある程度そこで泥団子の形を作り、水たまりから少し移動したとこ

ろで見つけたさら粉の砂をかけると、見事にツルツルの泥団子に変身していく。そんな私の真剣な様子に引き寄せられ、ノノカとサキがやって来た③。彼女たちも、あの日以来、泥団子に夢中になっている人たちだ。2人は「どうしたらそんなのになるん?」と私に尋ねてきた④。保育者ならば答えてあげるべきなのだろうが、私も現在必死である。ましてや、この方法はケンに教えてもらった方法だ。私はケンに説明された一連の工程をとりあえず伝え、「詳しくはケンくん聞いて。私もケンくんに教えてもらったんよ」とケンにバトンパスをした。誰かに教えたくて仕方のないケンは、待つてましたとばかりに丁寧にノノカとサキに教えている⑤。ノノカとサキはどちらかというと人に積極的に関わっていくことを得意としないのだが、ケンには聞きやすいようで迷いが出る度に「どうするん?」「ケンくん教えて〜!」とケンに声を掛けている⑥。そうしたはっきりなしの要求にもケンは非常に丁寧に対応している⑦。私たちが泥団子を楽しむ様子に惹きつけられて、何人もの子どもたちが、「何しよん?」とさら粉の掛け場所に集まって来る⑧。そうして、泥団子作りを楽しむ人たちは、私たちの泥団子を見て「どうするん?」と聞いてくる⑨。そこで、やはりとりあえず一連の工程を私たちは説明するのだが、最後は「ケンくんに聞いて」と答える。そうして、ケンは、その度に友達に丁寧に対応するのであった⑦。

さて、そんな私たちの所にソウシがやって来た。同様なやり取りをした後、水たまりの場所で必死になって何度も泥をすくって泥団子にすべく格闘しているのだが、なかなかうまくいかない⑩ようだ。しばらくすると、「ソウシ、別のことしてくる」と言って去って行った。

片付けの時間になった。私は子どもたちと一緒に園庭を片付けていくうちにリズム室の裏に辿り着いた。するとそこでは、年長組の子どもたちが泥団子作りを楽しんでおり、その一段の中に一人帽子の色が違う人が一人交じっていた⑪。ソウシだ。入園当初から、顔見知りの年長組のお兄さんとのつながりを軸にして、年長組の子どもたちに交じって遊びを楽しんでいたソウシは、年長組の情報を掴んでくるのに長けている。今回もいち早く、年長組の子どもたちがリズム室裏で泥団子作りを楽しんでいることをキャッチしたらしい。泥団子作りを諦めたというわけではなかったのだと思った。

さて、また数日が経ち、毎日毎日、ひとつの泥団子に向き合い、さら粉を掛け続ける⑫ノノカ。初めは彼女の掌にすっぽりと納まるほどの小さいサイズだった泥団子は、今、明らかに大きくなっているように感じた私は「ノノカちゃんの団子、そんなに大きかったっけ?」

と言葉を掛けた。すると、ノノカは「育てよるけん」と一言。どうやら彼女は、泥団子が日々大きくなってきていることに気付いていた⑬ようだ。ノノカの様子をよくよく見てみると、大きな泥団子を持ち続けるのは重いらしく、時々地面に置いて、さら粉で団子を覆うというようなことを行っている⑭。そんな彼女の「育てよる」という呟きは、まことしやかに子どもたちに伝わっていったらしく、そばを通りかかる子どもたちは、「ノノカちゃんの泥団子、育ちよんやろ?」と声を掛け、ノノカの泥団子を見て驚きの声を上げる⑮のだった。

- ①水たまりの泥を使って泥団子を作る楽しみを子どもたちで見出し、繰り返し試して楽しんでいる。
- ②水たまりの泥の水を絞って出来る泥を使うと泥団子になるというコツを見出し、保育者に自信をもって伝える。
- ③泥団子作りに熱心に取り組む子どもが、保育者が真剣に泥団子作りを楽しむ様子に惹きつけられる。
- ④保育者の泥団子を見て関心を寄せ、どうしたら保育者のような泥団子になるのか興味をもって尋ねる。
- ⑤水たまりの泥の水を絞って作る泥団子を編み出した自分の方法を友達に自信をもって伝える。
- ⑥疑問に思ったことを友達に言葉で伝えて教えてもらう。
- ⑦友達からの疑問に細かく教える。
- ⑧保育者や友達がしていることに興味を抱き、集まってくる。
- ⑨友達がしていることに興味を抱き、自分もやってみたいという欲求をもち、それを言葉で伝える。
- ⑩自分も真似てやってみるが思うようにならず試行錯誤する。
- ⑪年長組の子どもたちが泥団子作りを楽しむ場所を知っており、場所を移して試してみる。
- ⑫泥団子作りに没頭する。
- ⑬自分の泥団子が変化していることに気付き、目的をもってさらに没頭している。
- ⑭大きくなり持ちきれない泥団子を自分なりに方法を編み出し取り組む。
- ⑮友達の泥団子の変化が情報として他の友達に伝わり、興味をもって当事者の友達に伝える。

## (2) 考察

水たまりで始まった泥団子作りは、子どもたちにとって価値ある遊びとして位置づけられ、夢中になって遊びに没頭するようになった(①)。そのようにして泥団子作りに向き合う中で、ある子どもが、子どもたちが目指す形を形成する技術にたどり着いた。試行錯誤して生み出した経験は、喜びと自信につながり、保育者や友達に自分が作ることができたことを伝えるだけでなく、その技術を友達に丁寧に教えるという行動につながった(②⑤⑦)。そのようにして徐々に広がっていく泥団子作りの遊びと

しての面白さの領分は、子どもたちの間に徐々に広まり、惹きつけられ、泥団子作りを楽しむ仲間が増えていくこととなる(③⑧)。子どもたちには目的とする泥団子の形があり、そのことが強い意欲となり、遊びの目的でつながった友達関係の中で、知りたい意欲が言葉や態度で表現されることとなる(④⑨)。このようにして築かれた友達関係には、一種の連帯感のようなものさえ生まれる(⑩)。

水たまりでの泥団子作りで試行錯誤するも思うようにならなかったが、別の場所で別の時間に得ていた情報がつながって、新たな場所で泥団子作りを楽しむ子どもの姿があった(⑪)。子どもたちは、幼稚園での生活の中で様々な出来事に出合い経験の溜め込みを行っている。その出来事に出合った時点では価値のない出来事だったとしても、ある時に価値あるものへと変容することがある。このようにして、子どもの領分は広がっていくのだろう。

このような状況が織りなされながら、子どもたちはさらに遊びに没頭していく(⑫)。夢中になってひとつのものに向き合い続けるうちに、自分が価値あると見出したその泥団子は、自分の予想を超えたものへと変化していく。これは、前述の事例と同様ではあるものの、前述と違う点は向き合ううちに彼女は目的をもってこの泥団子と向き合っているということである。それゆえ、自分が手を加えるごとにわかりやすく変化を遂げていく泥団子への思い入れは「育てている」という表現となったのだろうと考えられる(⑬)。

## IV おわりに

本研究は、保育の環境、特に幼児の遊びの中で重要な位置を占めている土・砂・泥に関わる4歳児の遊びについての考察を行った。本研究においては、特に、砂場以外の園庭で幼児が土・泥・砂に関わる事例を中心に検討を行った。その結果、以下の4点について明らかになった。

### 1. 価値創造

子どもは、思い切り屈託なく遊び、身体ぐるみでその対象、この場合は「土・泥・砂」と関わる中で、その対象に対する“価値”を見出していく。それは、“何だかわからない”といった曖昧さを含みながらも、“何だか楽しそう”“何だか面白そう”といった好奇心に突き動かされ、夢中になってひとつのものに向き合い続けるうちに、生み出されていく。自分が価値あると見出したその対象が、さらに自分の予想を超えたものへと変化していくうちに、今度は目的というものが芽生えていく。こうしてひとつの何気ない遊びが、子どもにとって価値ある遊びへと変容した時に、子どもにとっての意味ある豊かな学びへと変容していくのだと考えられる。子どもは、幼稚園での生活の中で様々な出来事に出合い経験の溜め込みを行ってお

り、その出来事に出合った時点では価値のない出来事だったとしても、ある時に価値あるものへと変容することがある。このようにして、子どもの学びとしての領分は広げられていくのだと推察される。

## 2. “曖昧さ”から生まれる効用

子どもたちはこの場所で起こる様々な出来事に対して身体ぐるみで向き合いながら、この場所の特性、この場合はこの場所の土壌の特性を“何となく”感じながら遊びが展開していった。この“何となく”という感覚から生まれる思考は、何を生み出しているのでしょうか。

まず、砂場について考えてみる。砂場には、枠があり屋根がある。壁こそないものの、砂場の外の世界とは遮断されている。また、砂場の砂については、保育者等の大人がその用途に合わせて人為的に入れたものである。さらに、砂場には子どもたちに使わせたいと思う道具が用意されており、時には砂場用の倉庫も設置されている。このように、砂場では、砂場という名称に表現されているように「砂」を使って子どもたちに経験してほしい願いが、ある意味埋め込まれた遊び場である。

次に、泥団子作りについて考えてみる。泥団子作りという遊びについては、子どもたちにとって「〇〇にしたい」という目標が立てやすい。この子どもたちのもつ目標は、大人が考える目標とさほどの違いはない。それは、泥団子作りについての多くの書籍が発行されているところからみても、ある程度の遊び方についての方向性があることからわかる。この遊び場において、保育者が泥を触るうちに泥団子作りを思わず始めてしまったこと、泥団子作りと言えばサラサラの砂をかけることを思わず始めてしまったことから、見受けられる。このような遊びは、ある意味、大人の意図に委ねられ、遊びが展開していくことも多いのが現状である。

では、事例の水たまりはどういった場所であったのか。砂場でもなく、泥団子作りでもない、この場所で展開された遊びは、非常に“曖昧”である。砂場のような人工的に作られた枠がなく、どこからでも、どのような形でも遊びに参加することができる開かれた空間であった。このような開かれた空間は、園庭（園内）という生活に関する枠のみが存在する自由感が保たれており、子ども各々が自分の目的にあった場所で、目的にあった関わりを楽しむことができる。さらに、枠や屋根に守られた物がない自然の中にあるという環境は、天候に影響を受けることにより、子どもが創り出した環境に様々な変化をもたらす。自分事として関わる環境が時々刻々と変化する続けることは、子どもがもつ気付きの芽を常に刺激し続けることになる。変化模様についても、時にダイナミックに、時に微かに変化するという偶発的に起こる様相が、子どもの認知プロセスの深まりを生む。

こうして変化する場所の様相が、子どもたちの遊びの形態に変化をもたらす。それは、「〇〇遊び」というような名称で表現することが難しく、子どもたちが向き合い楽しむ状態そのものが“遊び”なのである。だからこそ、向き合う“もの”に夢中になって対峙する状況が生まれ、様々な思考を生み出すことにつながっていったのだと考える。

## 3. “水”の重要性

砂・土・泥は可塑性があり、それを操作することを通して面白さを感じることができる。この可塑性は主に人により操作されることから生じることではあるが、今回の遊びにおいては、それが天候によってもたらされることとなった。この天候により出現したり消失したりしたものの存在が「水」である。

雨がもたらす「水」の増加、晴れがもたらす「水」の減少により、場に存在する土壌の状態は多様に変化した。子どもたちが操作する土壌は、「水」の増減による変化の度合により、自分たちの思いに応じてくれることもあれば、時に裏切られることもあった。こうした土壌の変化とともに生じる子どもたちの複雑かつ多様な思いが原動力となり、子どもたちを土壌と向き合わせることへとつながっていったのだと考える。

このようなことから、砂・土・泥に関わる遊びを豊かにするうえで、「水」の存在は欠かせないものであると言える。

## 4. “ひと”の存在の重要性

入園当初、彼らはよく砂場に集まっていた。「砂場」は、家庭で生活する子どもたちにとっても馴染みの「環境」であり、本研究における子どもたちは様々な他園の様々な環境の中で3歳児の時期を経験し、入園してくる。園環境は園により異なり様々であったであろうが、「砂場」という環境は、どの園にも存在する環境であり、馴染みの「環境」であるのだろう。「砂場」という環境は、新たな環境において「安心」を得られる場所となっていたのであろう。「砂場」は、この場所に集まってきた新たな「ひと」と関係を築く環境となり得る。こうした時期を経たこの時期の4歳児の子どもたちにとって、保育者の存在は非常に重要である。「砂場」という拠点で得た「安心感」とともに、「砂場」で得られた新たな「楽しみ」を拠り所としながら、園生活を過ごすようになった子どもたちは、園生活の“場”を拡張し身体ぐるみで遊ぶ中で、新たな気付きを感じていく。この過程において、子どもたちの“安心”の拠点は、「場」が拠点となることもあるが、「保育者」そのものが拠点となり、子どもの安定につながっていくのだと考察された。また、4歳児の子どもたちにとっては、友達存在は非常に重要になってくる。先でも述べたよ

うに、遊び続ける中で生まれた「目的」という概念は、同じ目的をもって集まってきた友達の中で、一種の連帯感のようなものを生み出し、遊びがさらに発展していく。

本研究は、砂・土・泥に焦点を当て事例検討を行ったが、明らかになった4点のうち、「(1) 価値創造」「(4) “ひと”の存在の重要性」については、幼児期の子どもたちのどの遊びの場面を切り取っても言えることである。つまり、土・泥・砂に関する遊びは幼児にとって意味ある遊びのひとつであるということを保育者は見失うことがあってはならない。それと同時に、土・泥・砂に関する遊びの教材としての魅力について、さらに深く検討することが課題である。

#### 参考文献および引用文献

- 石川悟司（2016）子どもの心の動きと保育の意図のつながりを考える～私的体験「泥団子作り」からあそびの面白さを探る～．盛岡大学紀要，26，51-61.
- 笠間浩幸（2018）遊具「砂場」のソーシャル・イノベーション：砂場への「適切な砂」の標準化の試み．同志社政策科学研究，20（1），115-129.
- 小谷宜路（2013）幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究－幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点－．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，22，45-52.
- 吉川暢子・手塚千尋・森本謙・笠原広一（2020）幼児の土を使った遊びと探求Ⅰ－Arts-Based Researchの視点から実践を描き出す－．香川大学教育実践総合研究，41，57-69.